ない最後の文化祭　　小島なお

学校では毎年「文化祭」があってクラスの生徒が力を合わせて何かを創り上げる。小島の歌は、現役高校生の時に作ったもの。「ダンボール」に焦点を当てて高三の現在を少し醒めた視線で捉えているのがいい。『乱反射』（二〇〇七）所収。

七十二名の命がじんと冷えてゆく体育館の暗闇の中　　田中拓也

震災直後、中学校教員の作者は生徒を引率して近くの臨時避難所に移動した。冷静さを失わず的確に指示を出す歌がこの前後にある。緊迫した状況のなか生徒の「命」と、ともに寄り添う教員の「命」と合わせて「七十二名の命」。体育館の暗闇の、先が見えず、暗く冷えきった長い時間が歌われている。『雲鳥』（二〇一一）所収。

浮彫の校歌に夕のひかり射し家族は見上ぐ投票に来て　　花山多佳子

学校はそうそう行く場所ではない。子どもがいれば、授業参観などで行くが、卒業すればまず行かない。行くのは、この歌で歌われているように選挙に行くときぐらいだろう。久しぶりに訪れた学校で、掲げられた浮彫の校歌を家族全員が見上げる行為はどこか可笑しくて、もの悲しい。『胡瓜草』（二〇一一）所収。

泣きながらあをあをと髪垂らしゐる女子高生を麦とし思ふ　　喜多昭夫

チョークまで冷えてゐる朝の教室に男子入り来てチョークのやうに　　小川真理子

生徒らが石垣りんの詩のようにすんと立ちおり校庭の冬　　染野太朗

生徒がさまざまなものに喩えられている。どの歌も作者独自の感覚で歌われている。喜多作は、「麦」だ。女子高生のはかなく頼りなげな存在が青という色彩とともに感性豊かに表現されている。小川作は、チョーク。始業前の静かな冷えた教室に、すらっと背が高く痩せている今時の男子高校生が入って来る。チョークのように色白で無口な生徒の姿が浮かび上がる。染野作、生徒の立っている姿を「石垣りんの詩」に喩えているのがユーモラスだ。喜多作は『青霊』（二〇〇八）、小川作は「心の花」二〇一一年三月号掲載、染野作は『あの日の海』（二〇一一）所収。

海港のごとくあるべし高校生千五百名のカウンセラーわれは　　伊藤一彦

どんな生徒にも悩みがある。こんな態度で接してくれるカウンセラーがいる学校はすばらしい。学校も教員も、生徒をあたたかく迎える「海港」でなくてはならないのだ。俳優堺雅人もしばしば伊藤のカウンセリング室を訪れていた。『森羅の光』（一九九一）所収。

さらさらと鉛筆はしる音みちてひとは言ふとも学校清し　　小池光

誰かが何だかんだ言っても、学校はいい。小池が歌うように、私もそう思う。『山鳩集』（二〇一〇）所収。